

< 3 > 中部・近畿地区研究会の報告

学会通信No. 187号で案内した中部・近畿地区研究会が、さる 6月21日（土）に同志社大学ハリス理化学館において21名の会員の参加を得て開かれた。

第一報告、藤村美穂（関西学院大学研究員）氏の「森林保全の担い手と現代山村一和歌山県龍神村の事例」報告では、林業不振と過疎化が進むなかで、ムラや集落が全体として森林保全の担い手となっていない龍神村小又川集落の事例が、逆に入り合い利用林野が多くて森林がいわばムラによって経営されている兵庫県一宮町の事例などとの比較を通じて報告された（上記通信掲載の発表要旨参照）。同発表に対して、コメンターの寺口瑞生（松坂大学政経学部）氏より在村林家の性格、山林所有形態の構成、行政村の対応の在り方の違いなどの点からコメントがあり、その後活発な討論がなされた。

第二報告は、上記通信でお知らせした渡辺正（愛知大学文学部）氏が直前に体調不調で報告できなくなったため、コメンターをお願いしていた秋津元輝（京都大学農学研究科）氏に急遽報告者になっていただいた。秋津氏の「地域性活の拡充と人的ネットワークの形成」報告は、既に地域農林経済学会で報告されたものを特に山村問題に視点を絞って報告していただいたもので、過疎化の進む山村のような生活不利地域の生活問題を、社会資本整備問題、高齢者問題、活性化問題という三つの観点からアプローチしたものである。その際に、秋津氏は、生活者の主体性を重視する立場に立つとともに、地域活性化の中心主体形成を考慮した世代論と組織化（ネットワーク化）論を分析の手掛かりにすることの有用性を説かれた。秋津氏の報告内容は既に『農林業問題研究』（第124号 30-40頁 1996年12月）に発表されているので、詳細は同誌をご参照ください。

（黒柳晴夫 記）